

當九月發兌

主人元伊勢庄



譚貳編

滋賀縣美談
今常盤

布施

梅堂
工國政

編者
松林
伯圓

25

20

15

10



松元
松延堂
伊勢屋連之助

二編上

A479
2

48-5181

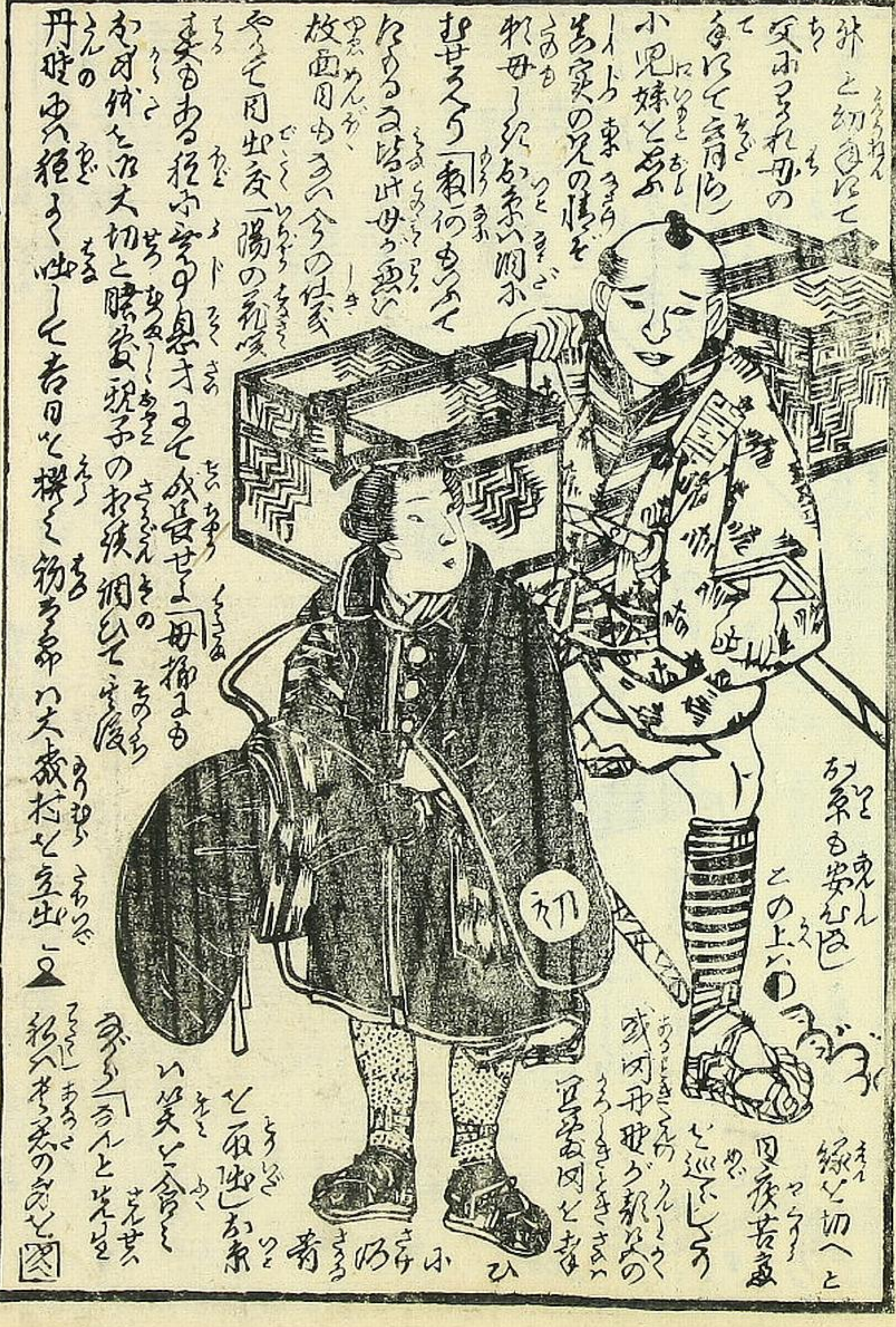




丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年

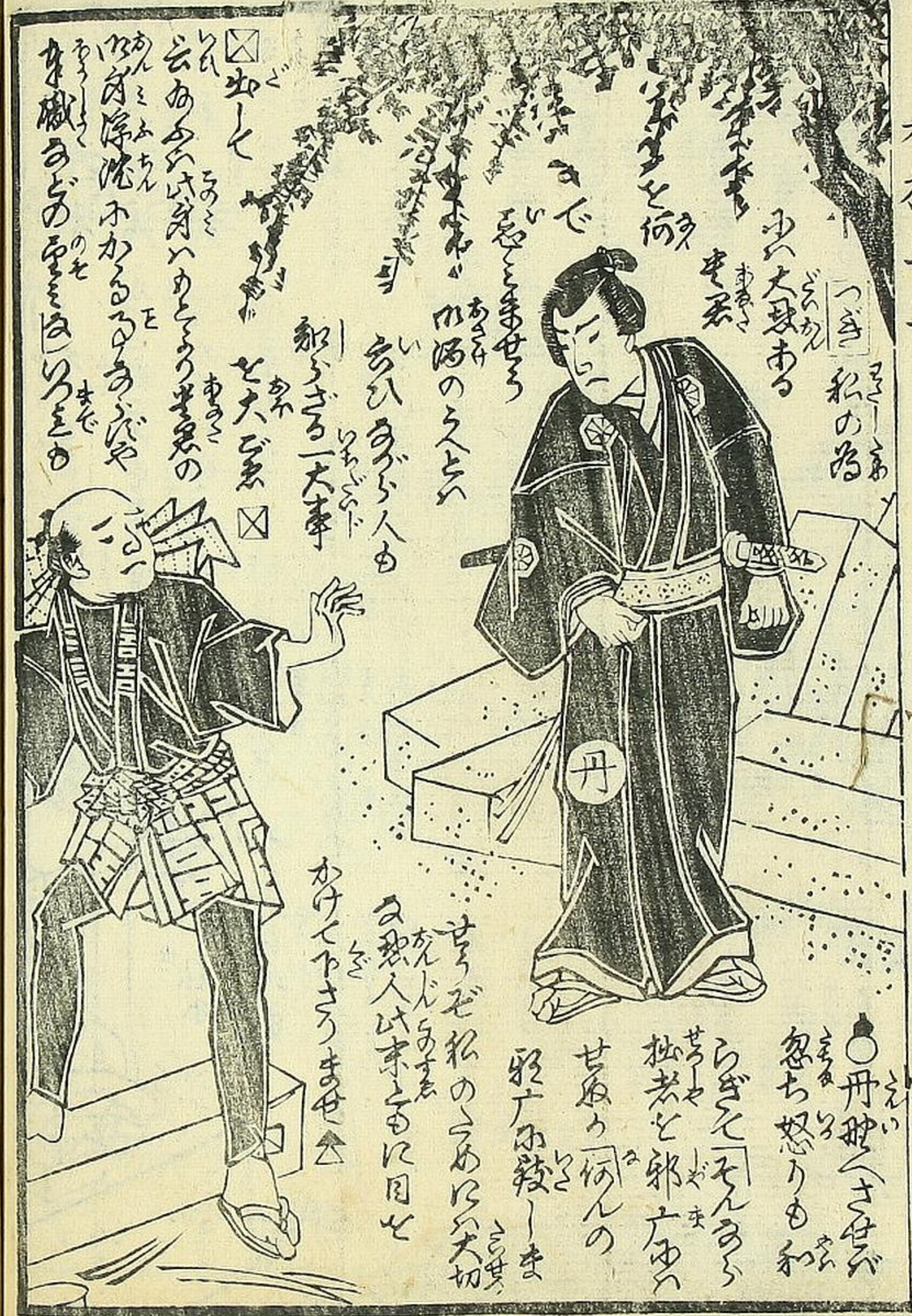
水口の後園へ
水口の後園へ
水口の後園へ
水口の後園へ
水口の後園へ
水口の後園へ
水口の後園へ
水口の後園へ
水口の後園へ
水口の後園へ

丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年



丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年

丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年
丹波の皇子の御年



つぎ 松の湯

少大政ある

を云

松の湯

松の湯

松の湯

松の湯

松の湯

松の湯

松の湯

松の湯

松の湯

松の湯

松の湯

○丹 丹の湯

丹の湯

丹の湯

丹の湯

丹の湯

丹の湯

丹の湯

丹の湯

丹の湯

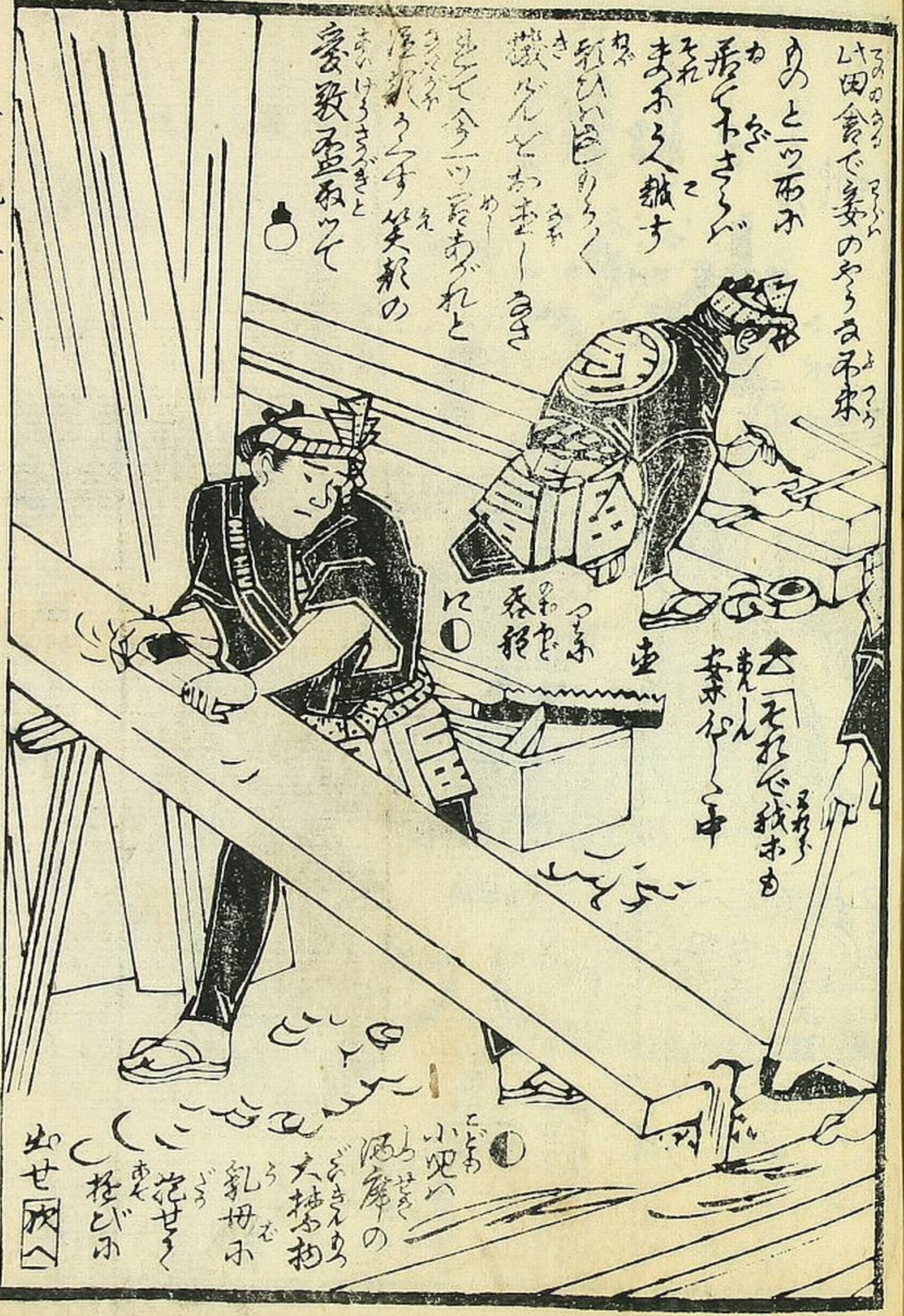
丹の湯

丹の湯

丹の湯

丹の湯

丹の湯



け田舎で妻のやうな不承

あとの雨ふ

あとの雨ふ

あとの雨ふ

あとの雨ふ

あとの雨ふ

あとの雨ふ

あとの雨ふ

あとの雨ふ

あとの雨ふ

あとの雨ふ

△ ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も

ちねを我も



かゝるしと書と槍が
 血を吸ふ如くさう
 ○彩の如くの形勢
 お糸の
 中面から
 百葉き月と田と
 落さうあはれ
 と書て今日と
 丹那とま
 明けの治田ま
 の妻とむ久
 時合全那練の
 世とありと士族
 の縁とせ還ほ

◆おとびてけ何と
 好機と受ホ一ツの竹葉
 丹那とま
 明けの治田ま
 の妻とむ久
 時合全那練の
 世とありと士族
 の縁とせ還ほ

◆おとびてけ何と
 好機と受ホ一ツの竹葉
 丹那とま
 明けの治田ま
 の妻とむ久
 時合全那練の
 世とありと士族
 の縁とせ還ほ



かゝるしと書と槍が
 血を吸ふ如くさう
 ○彩の如くの形勢
 お糸の
 中面から
 百葉き月と田と
 落さうあはれ
 と書て今日と
 丹那とま
 明けの治田ま
 の妻とむ久
 時合全那練の
 世とありと士族
 の縁とせ還ほ

◆おとびてけ何と
 好機と受ホ一ツの竹葉
 丹那とま
 明けの治田ま
 の妻とむ久
 時合全那練の
 世とありと士族
 の縁とせ還ほ

◆おとびてけ何と
 好機と受ホ一ツの竹葉
 丹那とま
 明けの治田ま
 の妻とむ久
 時合全那練の
 世とありと士族
 の縁とせ還ほ



上の巻の...
 何うと云ふあへ
 自死を多かる
 親切ゆひひき
 かへて強暴
 今比の
 与之
 大悪
 威日お素又
 ろち
 むら

別の...
 志くコレお素以終
 布絶家のな選
 令七百五十四下け
 海一に破るふ
 氏全山の何換
 志このぶ
 めつじいお
 後世の通うの令
 田の水はる見
 山綿へ物之布が
 長とと
 まる二何とら

○
 此れよくはけ
 丹波の
 元世は
 有く
 小里
 新け
 拙者
 水は
 弟
 出せ
 あり
 のま

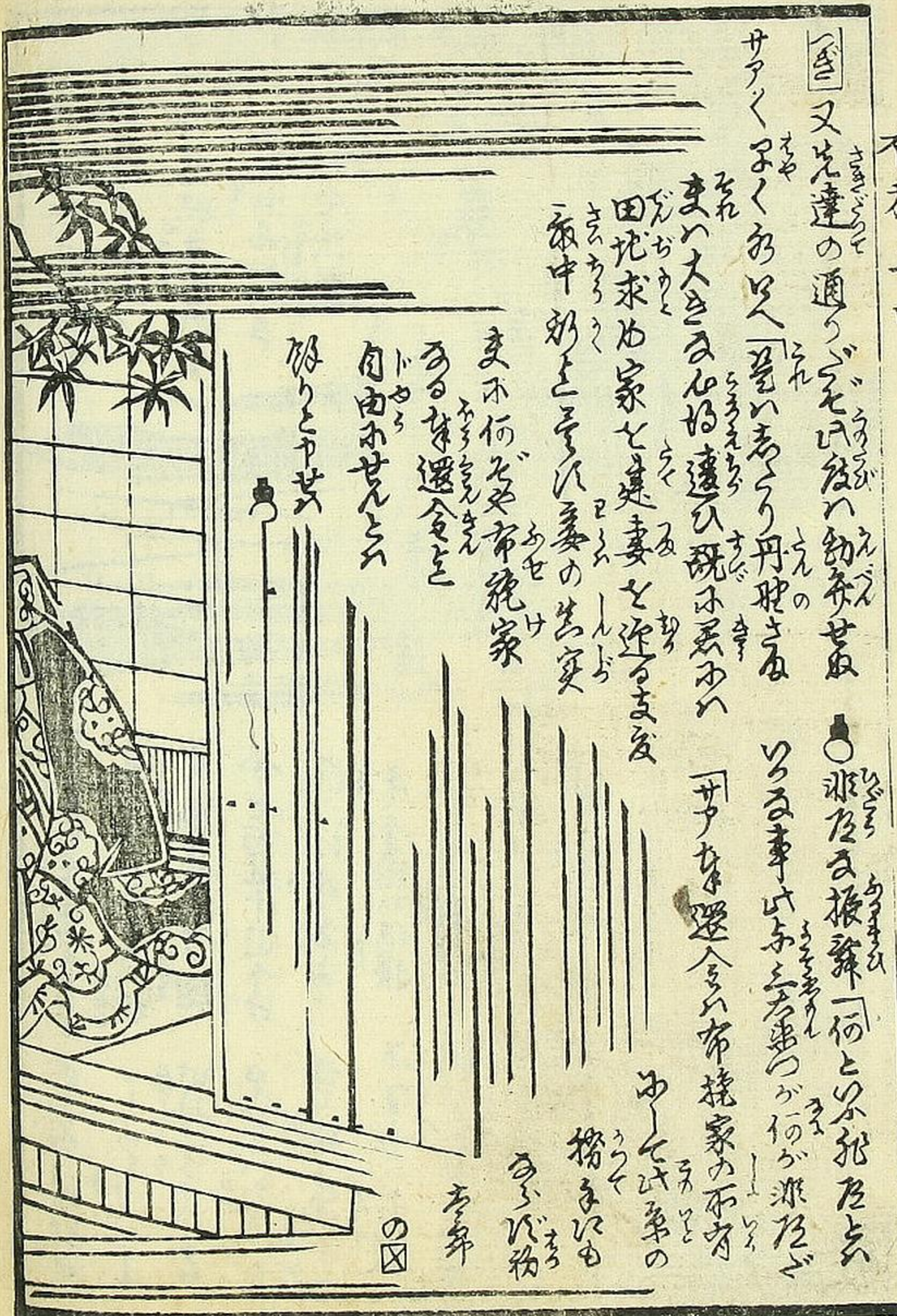


布絶
 物
 任田作
 必政志
 二海
 中

伊世
 七

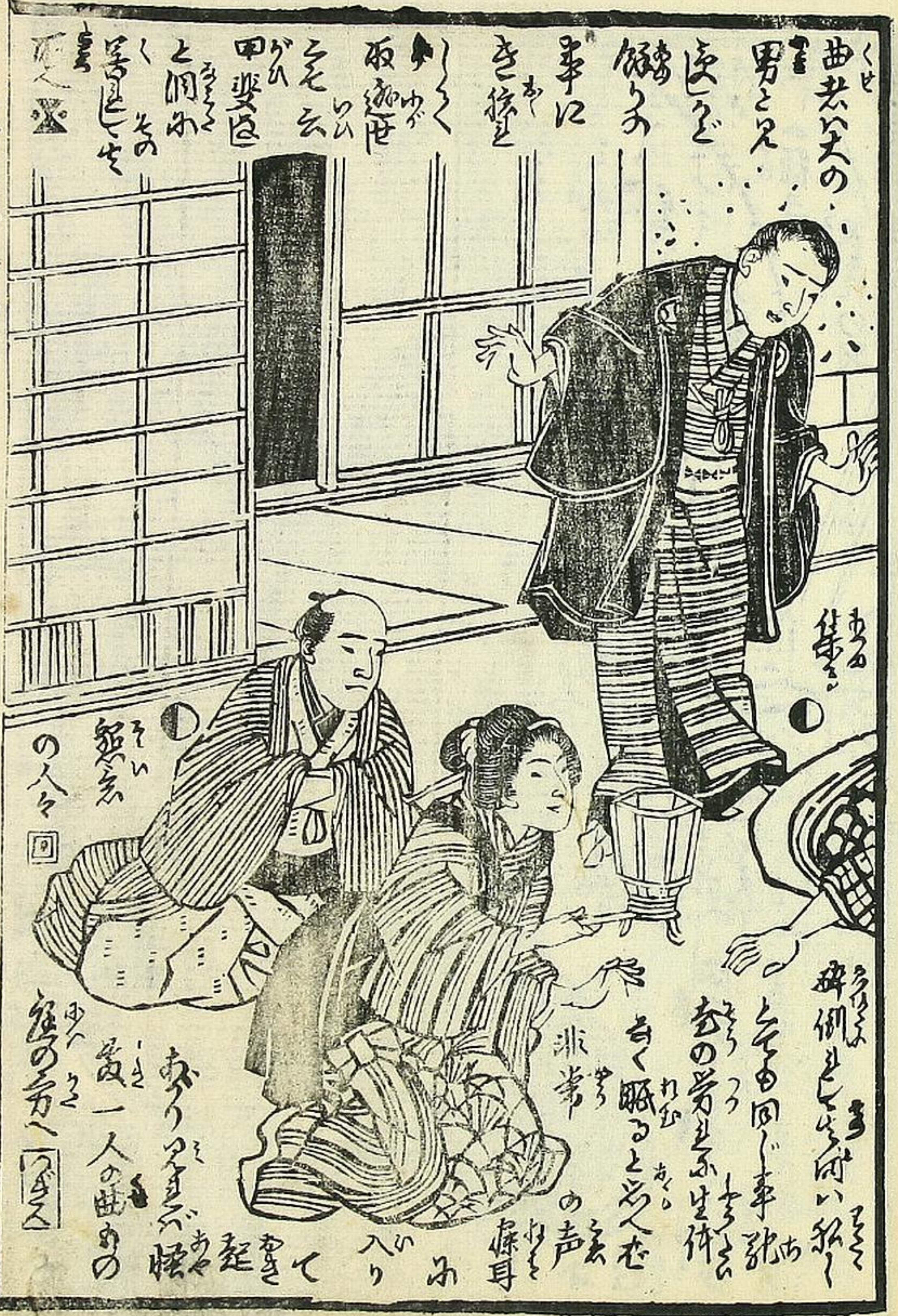


縁はて成るは
 何んか
 何んか



又先達の通うが
 サアく子くお
 丹地さ
 田北求ぬ家七建妻と
 衣中妙とそ
 ま何んか
 自由せん
 何んか

非なる振舞何んか
 何んか
 何んか
 何んか
 何んか



曲者の父の
 男と見
 後を
 候ふ
 事には
 きは
 板
 甲斐
 との間
 字は

の人々

母例は...
 とその...
 非...
 入...
 後一人の...
 毎...



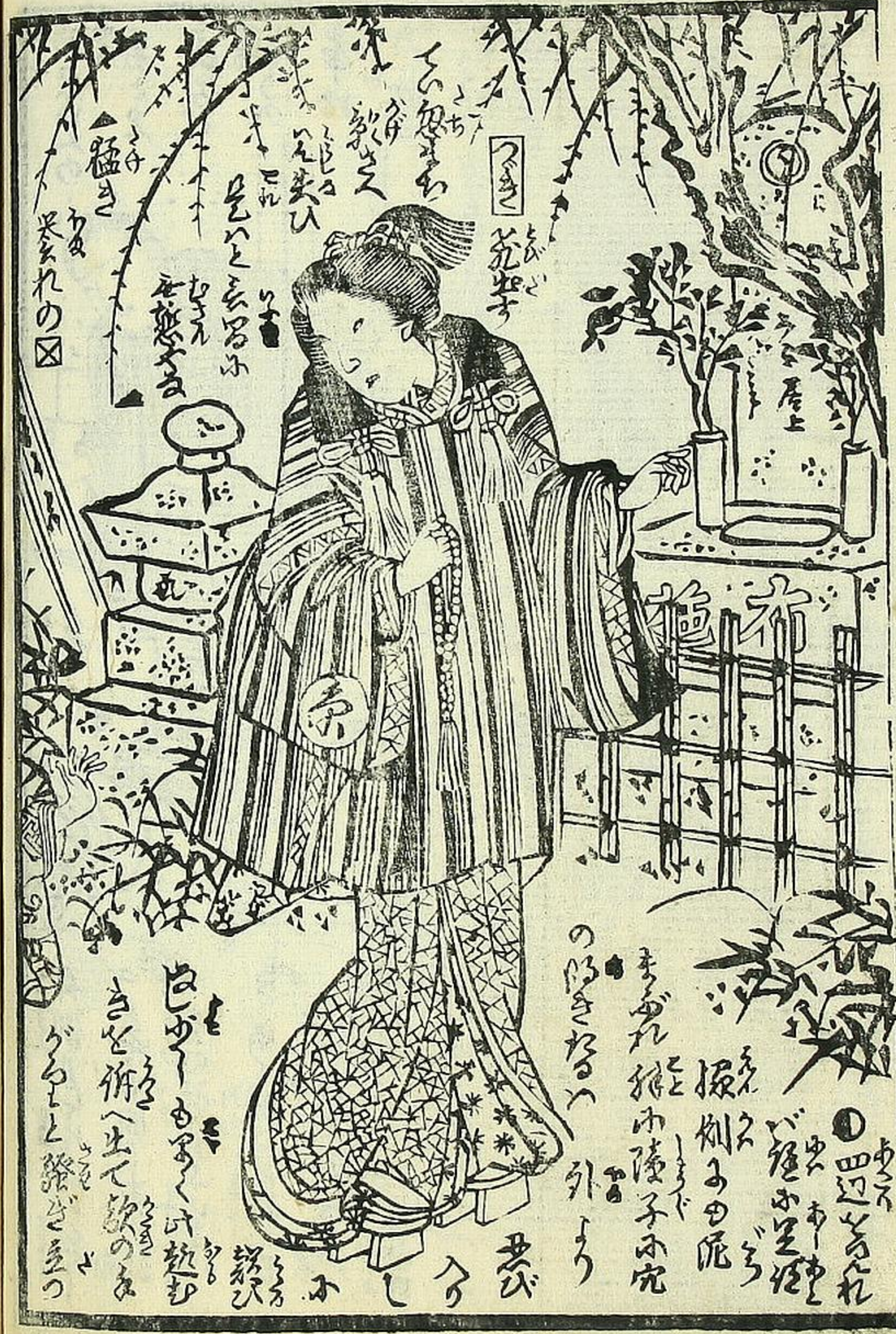
引...
 声...
 体...
 松...
 赤...
 神...
 せ...

通...
 時...
 林...
 酒...
 毎...



壮ま由只一刀ふけ佳生
 曲者の後退ひ久んとあど
 多弱き女子の
 むまは仕
 とのめは備さ
 推骨あれ皆を
 とつとけり小泣
 沈む農氏共へ口々に
 同にり酒癖類あは生放
 差や酒宴の玄帳よりなる凶
 事小成ほごらうと想るく

先祖代々
 茂
 せ亡ま仙あつが
 けする侍て下さる
 せ亡ま仙あつが



極き
 是れと云ふ
 極き
 是れと云ふ

極き
 是れと云ふ
 極き
 是れと云ふ

又身 初道の所産多し又脱中も鉄する母形先生吐血で

娘終然悉くをありなき

お果多き世と云ふや厚くは実の母のどり人々

やあつて声せひそめその

周懐と実き入る小掛つて横死せと近路の老と秋里

うふひの志と申す

て病死の仲母を火葬せしと人の噂の言はれむ

是のい経くの傳ある事

水口辺でも縁割ちを母より不取の事もある

心と志のあつては

あつて何れんは若し此事を今の宵ひそめ

いと志めやる母の

此事の事案を細い事とせんと味後あると信じて

の密偵林の下は

キ、之実子の終り何れんは死す

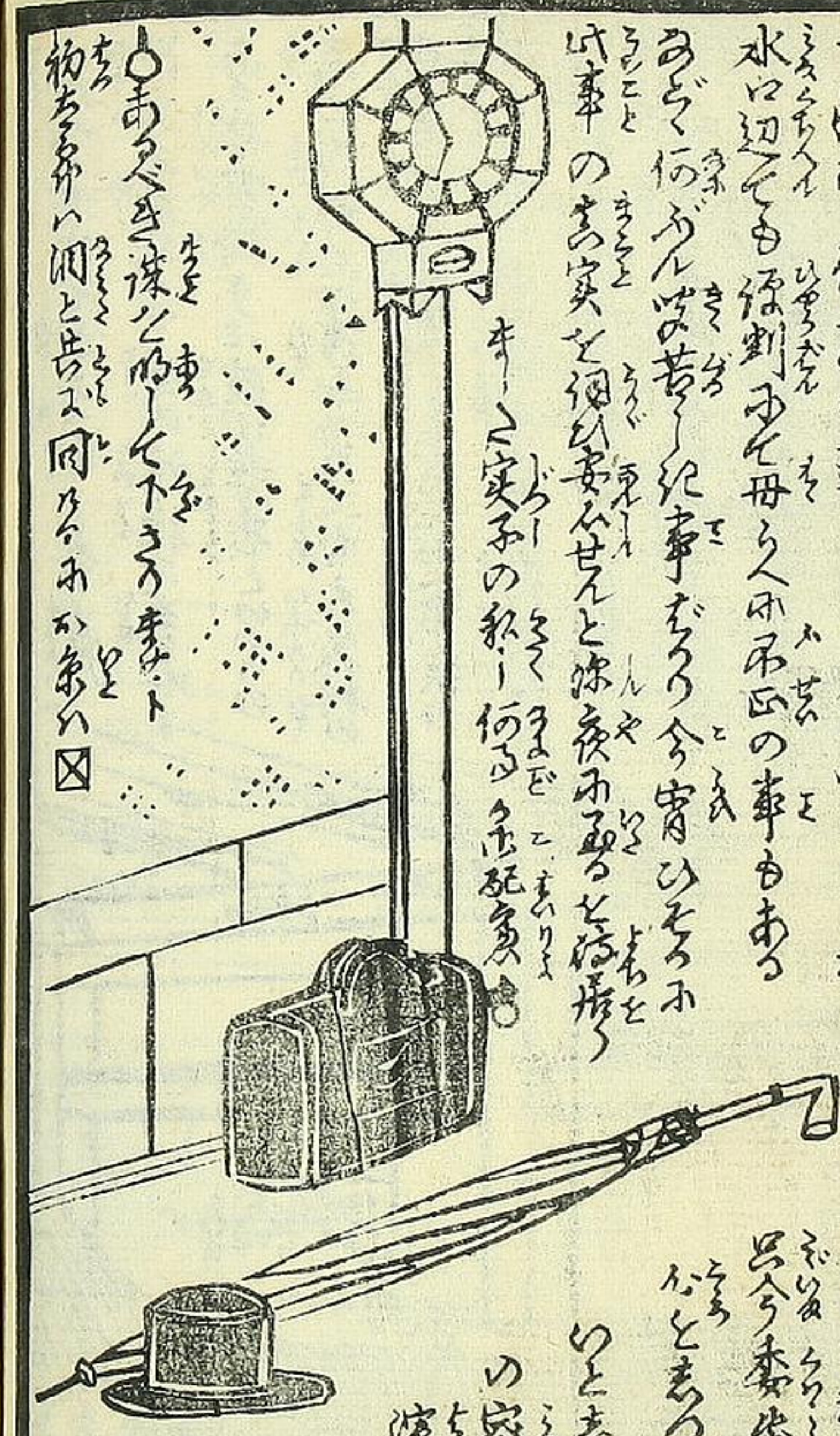
波田孝翁扱は

○あつて謀のめく下りまふト

身とをいふ

物とあつて同くあつてあつて

つ身と香



浦口支七

松林伯圖

新編伊香保土産

初編より五編大層

新編伊香保土産

常盤市

常盤市

常盤市

大石内蔵助一代記

大石内蔵助一代記

書

問

屋

主

之

助

元

元

地本

問

屋

主

之

助

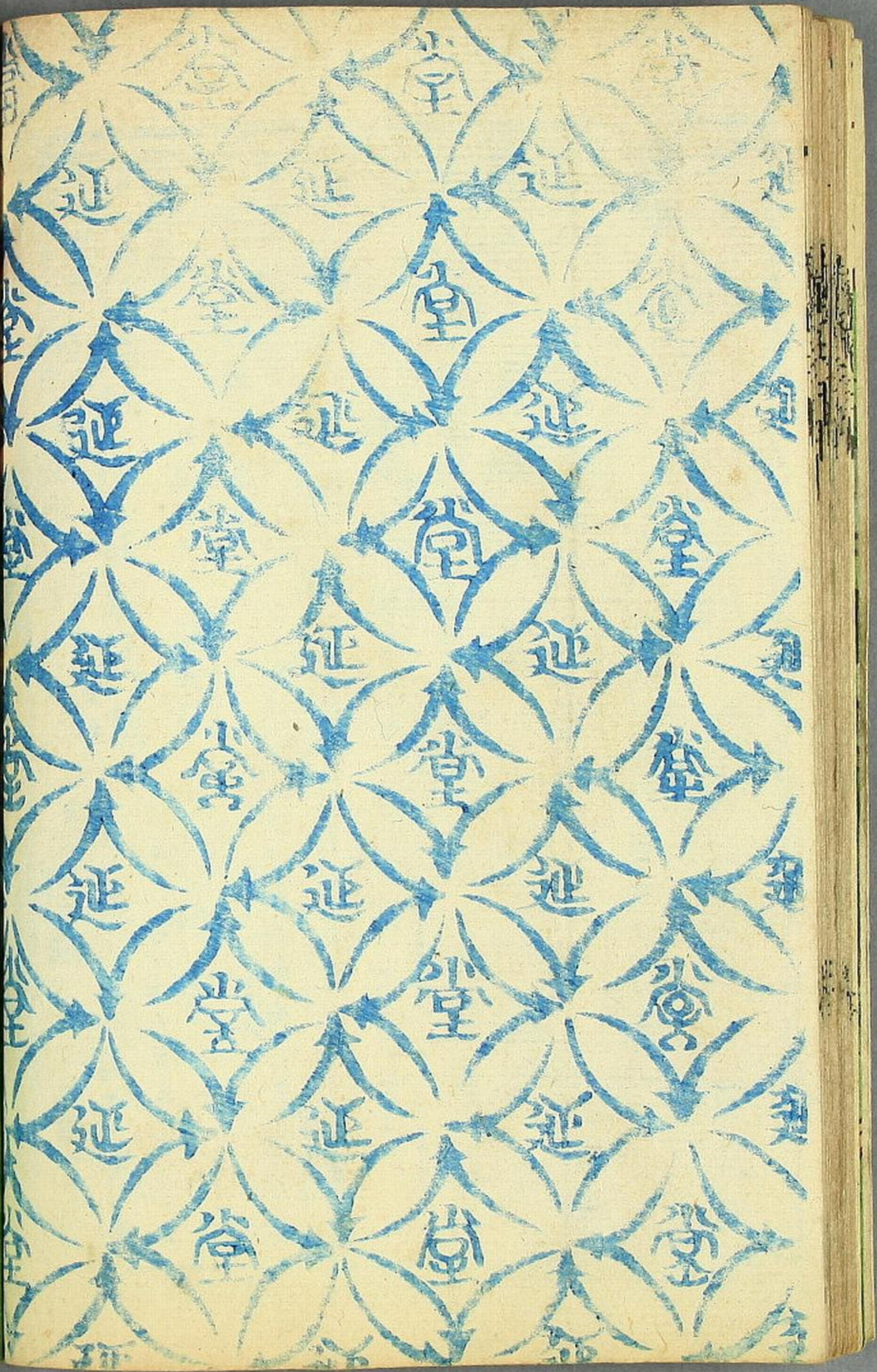
元

元

梅堂國政画



二編下



夕暮の程

夕暮の



第八回

系コレ物を弁 糸殺人の玄妙
 丹波といふ處にありて十月十六日の夜
 夜更けのころに曲者の酒小只下刺して
 果る死後秘蔵を掛りも能くさめて
 心を痛める母の心中推尋せむと云はれ
 兄てコレ母人のお伺ともあられは何故
 生首の白く徳候と形似表向新然
 とははありぬを以て後世に何故の
 ちの心持と云はれ
 子太の縁
 白く
 夕暮の程

口裏より知ての
 通りの丹波氏
 休の傍をこれと行状
 夫人お忍らば遠慮を殺す
 小お遠慮をあらわし腕前掃き
 那人と只一カ不交殺世に秘蔵の
 曲者ま故小吐血と憤病し世を
 白く飲油油とせむ九計果る後の
 左程と云はれて黒人あつても
 夕暮の程

夕暮の程に飲の
 夕暮の程
 夕暮の程



夕暮の程

夕暮の程



上申する事なれば松田家
 名も南のお茶を引
 巨て乳授せんと罪率二名
 命したる初を初代帝設家
 西の就子あり賤資合率杯
 去てあじふへ忽ち端也二名の標友

はしきまのふらぬ
 七除くの外の
 初幸の表
 と下婢けり
 由る初幸の表
 たや附ると二回万
 終中用持下まじ下

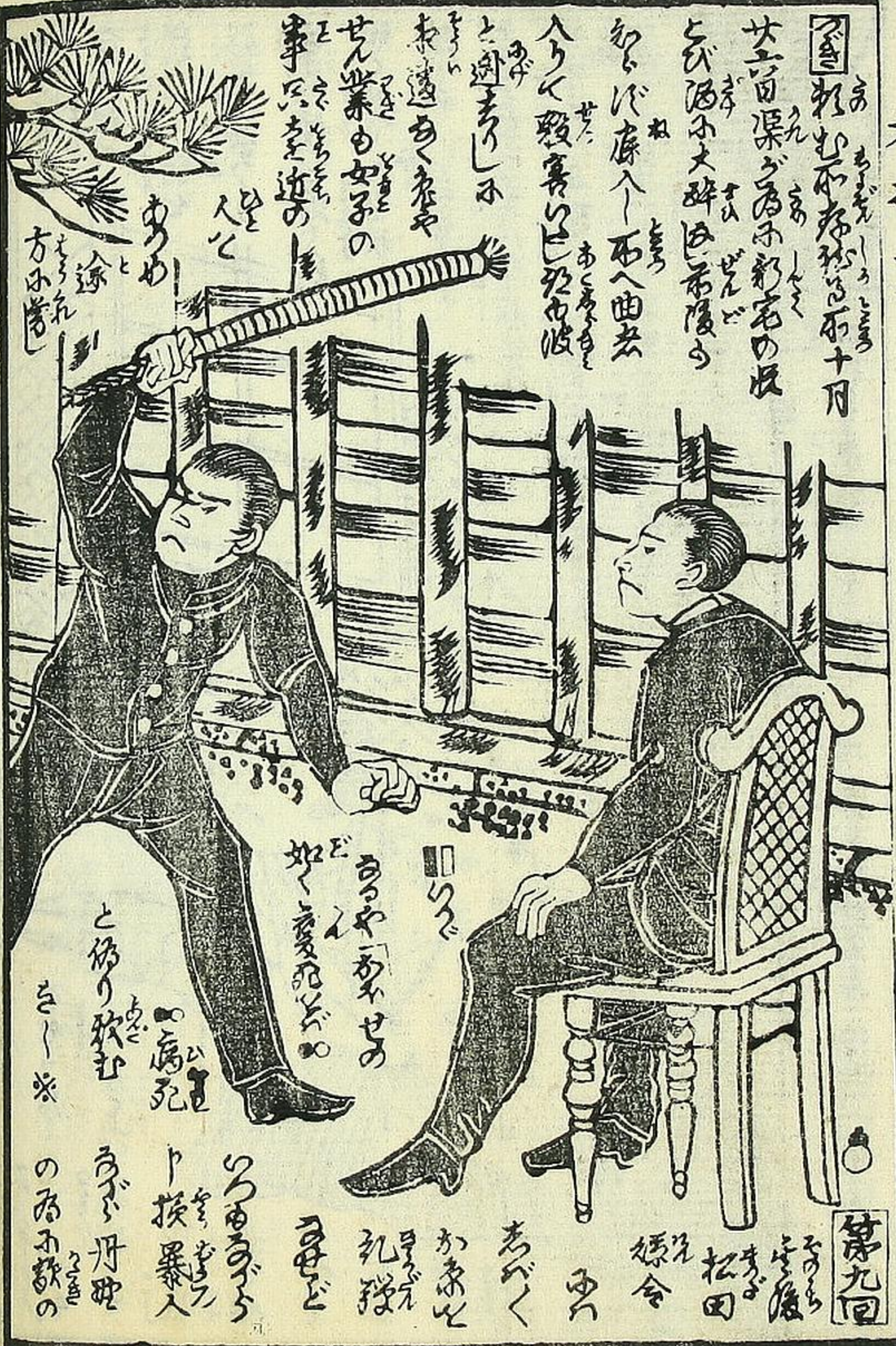
お物持り候と
 ちねたて何地へ
 田柄引お成
 とも自に成て
 把せし成る
 ちねたて何地へ
 田柄引お成
 とも自に成て
 把せし成る



初幸の表
 と下婢けり
 由る初幸の表
 たや附ると二回万
 終中用持下まじ下

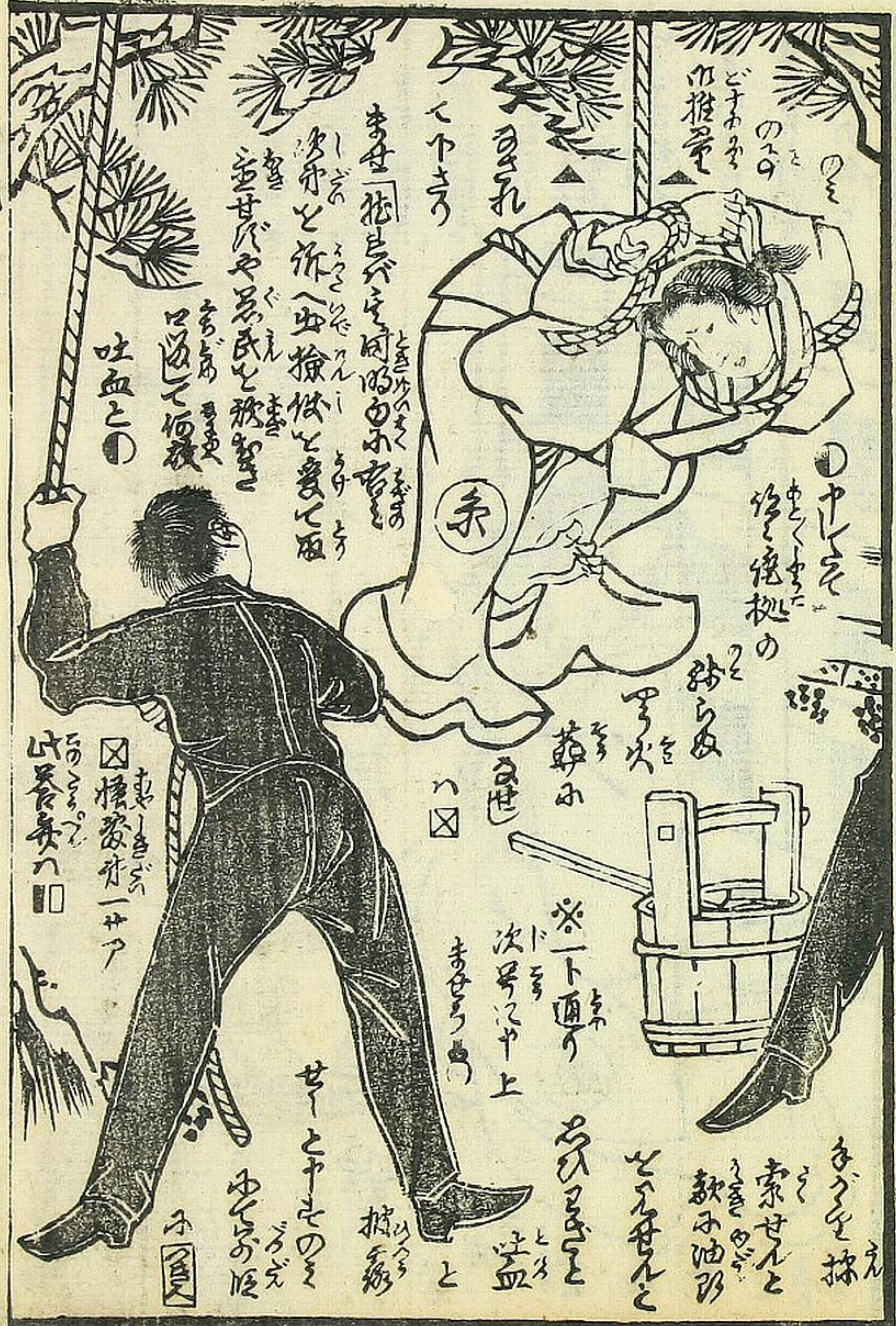
靴の儀は花袋へ通り
 一布純いと巾の毛許り
 同の筋のついで今
 是れ素ツウ
 一は縁座

初幸の表
 と下婢けり
 由る初幸の表
 たや附ると二回万
 終中用持下まじ下



第九回
 大目黒が為し影若の辰
 とは酒の大酔は酒後の
 知れば床へ入る曲者
 入りて寝るはしむる波
 と廻るし小
 未遠ゆく者
 せん業由女子の
 事只を道
 方小書

あやあせの
 如く愛の
 ありあせの
 とゆり歌む
 さ〜※
 松田
 徳令
 志はく
 かあは
 礼後
 丹世
 のあふ歌の



第九回
 大目黒が為し影若の辰
 とは酒の大酔は酒後の
 知れば床へ入る曲者
 入りて寝るはしむる波
 と廻るし小
 未遠ゆく者
 せん業由女子の
 事只を道
 方小書

あやあせの
 如く愛の
 ありあせの
 とゆり歌む
 さ〜※
 松田
 徳令
 志はく
 かあは
 礼後
 丹世
 のあふ歌の

報知新聞
布施譚
編者 伯圓
工 梅堂

○海防の練令統とあるは皆一然とてか
 一が萬分おまが云如く拷問後おま一
 百死死伏すとの事事か謀心おまお
 ても無様うお服の具う養愛操後致
 さんと云用うの取分てお系といら
 獄吏お云付お花お尚先おあり拷問に
 以て成村おお庭上の上候あり
 津田候るといへるの老丹丹中
 中との事事とてよく御座へまを
 相へ六月廿六日帝候家へお丹中を
 報しおあま報をを存しおけいの
 ありんと疑ひうを修し極回を拍引
 一と縁座へをかくりたり

新編伊香保土産
 今常盤布地
 大石内蔵時一代記
 伊香保屋庄之助板元

